提供:知覧特攻平和会館

Report ―戦後80年平和事業―

知覧特攻平和会館出張講話

特攻の出撃基地があった鹿児島県・知覧。その地に建つ知覧特攻平和会館は、当時の惨劇を伝えています。豊科公民館ホールで8月2日に開かれた同館の出張講話には約300人が参加し、語り部・桑代照明さんと学芸員・八巻聡さんが特攻の歴史背景や隊員の出撃前の状況、安曇野ゆかりの隊員などを語りました。当日の講話の様子を紹介します。

特攻の出撃地となった知覧

重さ250キロの爆弾を積んだ戦闘機で敵の艦船に体当たりして沈める特攻作戦。操縦するパイロットは必ず死ぬ「必死」条件の作戦です。日本の戦況が悪化した太平洋戦争末期、沖縄に上陸する米軍と連合軍を阻止するために始まったこの作戦では、1036人の隊員が出撃し命を落としました。そのうちの439人は本土最南端にあった知覧基地から出撃しています。しかし、実際に体当たりに成功した機体は1割程度。ほとんどは途中で墜落したり撃ち落とされてしまいました。出撃した隊員たちの年齢は平均21歳。中には17歳の隊員もいました。

笑顔の裏にあった涙

出撃直前に撮影した写真に写る隊員たちは皆、笑顔を浮かべています。数時間後にはこの世にいないと分かっているのに、なぜ笑っているのでしょうか。死んでいく自分が悲しい顔をしていたら、家族は悲しむ。せめて写真には満面の笑みを残したいという思いがあったのだと思います。

知覧基地から出撃する隊員たちは、三角兵舎と呼ばれる宿舎で待機していました。待機の時間は短くほとんどが1～2日、長くても1週間。そこで隊員たちの身の回りの世話をしたのが、なでしこ隊と呼ばれる地元の女学生たちでした。ある日女学生が出撃した隊員の布団を片付けていると、びっしょりにぬれて重くなった枕を見つけたそうです。このように出撃前日に思う存分泣き、当日は笑顔で飛び立つ隊員もいました。沖縄へ向かう機体の中で母親の名前を叫ぶ隊員もいたという証言も残っています。

Pick Up　自由主義に憧れた特攻兵

池田町に生まれ有明村で育った上原良司。大学在学中に陸軍へ入隊し、操縦士を志して飛行訓練を受けました。その後、特攻に志願し1945年5月11日に知覧から出撃、22歳で戦死しました。

出撃前夜に記した「所感」には、自由を尊ぶ自分の信念の正しさと日本の敗戦を予見し、その後の願いがつづられています。

大切な人へ残した遺書（おもい）

軍事秘密のため自分がいつどこから出撃するのか誰にも話せなかった特攻隊員ですが、届いた手紙をたよりに知覧にたどり着き出撃間近の息子と再会できた父親がいます。この隊員は一度出撃したものの、機体のエンジントラブルで引き返し、明日再度出撃することになっていました。父親を見た隊員は「父ちゃん」と言って駆け寄り、その夜は親子で過ごすことができました。父親は朝まで息子の寝顔をのぞき込み、翌日飛び立っていく姿を見送ったそうです。

知覧平和会館には自分の両親やきょうだい、婚約者などに宛てた隊員の遺書が数多く残っています。自分が死んだ後悲しまないように母親を気遣う手紙、相手の幸せを願いつつも「会いたい、話したい、無性に」とつづった婚約者への手紙もあります。

安曇野ゆかりの隊員たち

ここ安曇野からも陸軍で3人、海軍で2人の特攻隊員が出撃しています。これは現在わかっている人数で実際にはもっと多いかもしれません。艦船ではなく、敵の施設や飛行機を破壊する特殊部隊・義烈空挺隊（ぎれつくうていたい）に所属した飯田秀臣さんは母親に宛てた遺書を残しています。義烈空挺隊は、日本各地の空襲を防ぐために米軍の拠点基地があったサイパン島などへの攻撃を予定していましたが、戦況の悪化により中止に。最終的には、沖縄の飛行場に向け12機が出発したものの、機体の故障などで突入に至ったのは1機のみ。多くの隊員が命を落としました。その他にも浅川又之さん、上原良司さん（上記参照）もさまざまな思いをしたためた遺書や所感を残し出撃しています。

講師に質問する参加者

Voice　伝え続ける思いと歴史

講話を終えた２人に特攻を語り継ぐ活動に込めた思いを聞きました。

語り部
桑代照明さん(68)

私は戦争を経験していません。だからこそ、深く学び、当時のありのままを伝えるように努めています。語り継ぐことが特攻の報いになると信じています。

私たちの世代で終わりにすることなく、特攻の歴史を次の世代に伝え、つなぐことが大切だと思います。私も残された資料を通じて伝え続けていきます。

学芸員
八巻聡さん(49)